

---

## 市政と科学的調査

---

### 過 清 明

市政の改善を進める原動力は、**三つの点**に求められるとおもう。第一は市民の活動であり、第二は都市の理想像の提示であり、第三は科学的調査の実行である。

#### — 市民の活動 —

まず第一に、市民が市政に無関心であれば、都市の発展は絶対に望むことはできない。自治体が、文字どおり、住民の自主的な活動の上のみ維持されることは常識であるが、狭い区域の町村と違って、大都市ともなれば、市民が市政に干与する緒口を発見することは容易でなく、けっきよく成り行き任せや、あてがい扶持に終わることが多い。それだけに、よほど積極的な意欲を持たなければ、市民活動の実効はあがらない。もちろん、ここでいう市民活動というのは、市民集会に参加するというような派手な行動だけをいっているのではない。日常の市民生活でえた数々の体験を、市政に生かす努力と工夫を、厭がらずにつづけることを、主に意味している。道路工事の処理が十分でないため歩行に困難を来たすとき、水道の鉄管が破裂して、大量の水が街路に溢れているとき、街灯が消えていて夜間の通行に危険を感じるとき、清掃車が汚物を残してゆくとき、下水や堀割が悪臭を放っているとき、と一々挙げればきりが無いけれども、こうした場合に、誰かがやるだろうなどと考えず、自分で必ず責任当局にかけ合う癖をつけることである。

私たちは、昔から役所や裁判所へ足を向けることを億劫がる風習のなかで育ってきた

が、こういう惰性をまず振り切るところから、ほんとうの市民活動が生まれる。たとえ自分だけの不便ではなく、みんなの共同責任であるにせよ、誰かが先鞭をつけなければ、共同のしごとにはならない。私自身も、このごろ通勤の際には、なるだけ眼を光らせて歩く癖を、つけるようにしている。眼を光らせるだけでなく、電話であるが、注意したこともある。そういう場合、注文をつければ、案外早く直してくれることもあることを知って、いろいろと勉強になったものである。こういう個人の行動が重なれば、やがて同じ意欲をもつひとの間に、一種の連帯感が生まれ、生きた市民団体が育つことになる。そうなれば市政の末端だけでなく、その全貌についても、関心や判批のカンドコロが判かるようになる。特定の行事に参加する日だけ、団体意識があるというのは、市民活動の正しい姿とはいえない。

### — 都市の理想像の提示 —

第二は、都市の理想像の提示である。これは市政を担当する主たる責任者の任務である。市長であっても、市議員であってもよいが、私たちの住む都市の未来像を、市民の前に描く必要がある。私たちの日常の些細な関心や活動が、一体、将来の都市のありかたに、どのような意味をもっているのかが判からなければ、その意欲は、永持ちしない。私たちの小さな努力が、やがて、都市建設に、どのような形で実を結ぶのか、それとも、その場かぎりのこやく張りにすぎないのか、この差異は、市民活動の発展に大きな影響をもつ。道路や橋の建設や、港湾の整備が、特定の業者を潤おすのではなく、市民全体の利益と要求に、どのように具体的な映像で浮かんでくるかを、示すことは、市政を預かる指導者に課せられた不可避の義務である。私たちが、ささやかな家を持ったとき、あるいはアパートを借りたとき、やがて生活の向上とともに、家なり部屋なりを、自分の住みよい環境に仕立て直おそうとする小さなイメージがある。貯蓄をする場合でも、それには自分の生活設計を、その胸に描いている筈である。こうした理想像を、都市もまた持たねばならない。公害を考えないその場しのぎの工場建設や土地の掘り返えしでは、都市は混乱のくりかえしにすぎない。

だが、理想図だけを追っていけば、その理想と現実との喰いちがいが大きいと、とかく私たちは、挫折感に陥りやすい。そこで理想を描くためには、それを実現する手段との関連を考える必要が出てくる。なぜなら、手段を無視した理想は、絵にかいた餅にすぎないからである。改革の理念にあまりに急であるものは、とかく、この理想と手段との関連を忘れがちになる。革新市政の局にあたるものも、それに期待をかけるものも、ともに、この点に深く注意することが肝心である。

## — 科学的調査の実行 —

この失敗に陥らないために必要な条件が、いわゆる科学的調査である。都市改善の第三の原動力が、すなわちこれである。

かって、アメリカの市政改革運動に、みずから従事し、また大正10年、時の東京市長後藤新平に招かれて来日し、「東京市政論」を著わしたチャールス・ビアードは、次のように語っている。「米国市政の腐敗は久しいことでありましたが、その改革運動はしばしば試みられて、しかも常に失敗しました。それは感情的な正義観のみから出発した人道論では、市政のような複雑な仕事の改革はできなかつたからです。そこで、最近米国で起こってきました運動は、市政自身を科学的に研究調査して、いかにすれば悪政ができなくなるかの根源を突きとめることでした。抽象的な善政論から一歩進んで、具体的な政策を市政のために提供することでした。この目的のために有志家によって組織されたのがニューヨーク市政調査会でありまして、その結果、市政改革論者は、ここに初めて具体的な政策を持つようになり、また市政の現実的な検討も可能となり、しだいに市政の腐敗が跡を絶つようになってきたのであります。これが、市政の腐敗を防ぐ唯一の恒久的な方法だと思えます。」（鶴見祐輔「後藤新平伝」による）

ビアードのこの言葉は、東京市政調査会の設立に有力な根拠を与えたが、かれの提示した改革案は、当時の東京市政にあぐらをかいていた守旧派によって、「後藤の大風呂敷」と笑殺された。しかし、関東大震災と大戦の体験は、ビアードの改革案が真理であることを実証した。もしビアードの案にしたがって、東京市の改造が行なわれていたならば、おそらく、震災やこんどの大戦で、あれほどの死傷者はでなかつたであろうし、今日の交通地獄や水道飢饉は、もっと緩和されていたであろう。都市の改造と市政の改善において、科学的調査の重要性を、これほど明白に教えてくれた先訓はまたとないといってよいだろう。これは東京の例であるが、他の大都市にとっても、同じ意義をもった教材といってよい。「科学的調査こそ市民活動の灯台であり、市民活動の羅針盤たりうる」と述べた東京市政調査会の設立趣意書は、決して、誇張の言ではないのである。調査と結びついた市政改革の理念こそ、市民活動を生かすともしびである。（東大教授）